

## バイエルンにおけるドイツ社会民主党と プロテスタント教会の対話集会 1948年

安野正明

はじめに

1959年11月13日、ドイツ社会民主党の党首エーリヒ・オレンハウアー（Erich Ollenhauer）は、1925年のハイデルベルク綱領に代わる党の新綱領を制定するためボンのバート・ゴードスベルクで開かれた臨時党大会の基調演説で次のように述べた。「社会民主党はその綱領において、世界観政党や教会に代わる存在となろうという要求を政党として掲げないという結論に達した。党の再建後間もなく1946年にクルト・シューマッハー（Kurt Schumacher）が述べた考えを、この綱領に我々は書き留めたのである。彼はこう言った。『ある人間が社会民主主義者となるのがマルクス主義的経済分析の方法を通じてであろうと、哲学的ないし倫理的動機からであろうと、山上の垂訓の精神からであろうと、それはどうでもよい問題である。社会主義者となる精神的人格性の主張や動機の根拠付けについて、党においてはだれもが等しい権利を有するのである。』社会民主党は1946年以来十分にこの見解に従ってきたが、それを我々は綱領として確定したいのである。また、それは社会民主党と教会との関係を規定したところに特にあらわれている。<sup>(1)</sup>」

オレンハウアーは1946年のシューマッハーの「社会主義者となる動機

の多元性の承認」と1959年のバート・ゴードスベルク綱領との連続性を指摘している。オレンハウアーが強調したように、戦後初代の党首として社会民主党史に大きな足跡を残したシューマッハーのこの発言は、それ以前の社会民主党の歴史を振り返れば画期的なことであったと言って過言ではない。1946年に語られた「社会主義者となる動機の多元性の承認」は第一義的には社会主義の基本的価値の問題とかかわる。が、ここで注意を喚起したいのは、バート・ゴードスベルク綱領のなかでも何よりも教会との関係の規定に、シューマッハーのこの遺産が刻印されているとオレンハウアーが述べていることである。

バート・ゴードスベルク綱領には「宗教と教会」という一項がある。<sup>(2)</sup>そこには、以前の社会民主党の諸綱領にはなかった「協力関係」(Partnerschaft)という概念で、社会民主党と教会とのあるべき関係が規定されている。「協力関係」とはすでに達成された成果としてではなく、常に「用意がある」という将来へ向けての目標として掲げられている。バート・ゴードスベルク綱領のこの部分はハイデルベルク綱領との断絶の顕著なか所であるが、バート・ゴードスベルク綱領制定過程の研究で「宗教と教会」の問題は経済政策・国防政策等と比較すれば、従来看過されがちな研究領域であったのではないだろうか。

このような問題意識を持って、バート・ゴードスベルク綱領制定に至る戦後社会民主党史を読み直せば、一般にシューマッハー時代の社会民主党の歴史を論じた部分では「社会主義者となる動機の多元性の承認」については触れられていても、それに伴う社会民主党と教会の関係とその変化については掘り下げた分析の欠如していることは認めざるを得ないであろう。

シューマッハー時代の社会民主党とプロテスタント教会との関係に焦点をしばった包括的研究としては、マールブルク大学に提出されたマルティン・メラ<sup>(3)</sup>の学位論文がある。この研究は、前半で教会の社会主義観、社会民主党の教会・宗教観を前世紀から戦後に至るまでバランス良

く跡付けている。それを受けて後半で、戦後間もなくダルムシュタット市長で後には社会民主党の指導部執行委員、連邦議会議員となるルートヴィヒ・メツガー（Ludwig Metzger）の影響下にあったヘッセン州フランクフルトを拠点とする「ドイツ宗教社会主義者同盟」、および教会の「福音アカデミー」を中心にして社会民主党と教会の関係を分析している。この論文のドイツにおける戦後社会民主党史研究の欠落部分を埋めた貢献は評価されるべきであるが、著名な学者や後には「中央」で顕著な働きをした政治家を対象にしての思想的分析が中心となっている。

占領期、各地の様々なレベルで社会民主党とプロテスタント教会との間で対話集会がもたれた事実に言及される場合も、対話の内容や集会の経過の詳細については史料制約からか知ることのできぬ場合が多い。その中であって、本稿で扱うニュルンベルクのキリスト教社会主義者ユーリウス・ツィルケルバッハ（Julius Zirkelbach）によってイニシアティブが取られ、1948年に二度にわたってバイエルンの州レベルで開かれた社会民主党とプロテスタント教会の対話集会は、ボンの社会民主党アルヒーフに発端から挫折に至るまでの一連の経過を跡付けるに足る史料が残っており、無名の党員の努力により実現した対話集会の政治過程の実証的歴史研究の可能な例である。

この事例の検討から得られる結論を普遍化することには慎重でなければいけないが、シューマッハーの「社会主義者となる動機の多元性の承認」により社会民主党が果たして変わったのか、社会民主党の宗教や教会に対する対応がどう変化したか、あるいはしなかったのか。また、シューマッハーの呼びかけに対し教会・キリスト者の側にどのような応答があり、いかなる経緯で両者が接触し、それが歴史的に築かれてしまった長年の両者の敵対関係にどのような影響を与えたか。また、バート・ゴデスベルク綱領の社会民主党と教会との「協力関係」というテーゼは、シューマッハーの「社会主義者となる動機の多元性の承認」から引き出

せる理念であろうか。これらの問題を、1948年のバイエルンの対話集会の分析を通じ、考察したいと思う。もとより本稿は、1959年のパート・ゴードスベルク綱領制定過程を研究する前提知識として確認したいことの一側面を扱った覚書的ノートに過ぎない。パート・ゴードスベルク綱領にいう「教会」とはカトリック教会を含むが、本稿ではプロテスタント教会との関係のみを検討対象とする。

## I ニュルンベルクのキリスト教社会主義者の活動

1946年4月、ニュルンベルクで「ドイツ社会民主党内キリスト教社会主義者共働団」(Arbeitsgemeinschaft der christlichen Sozialisten in der SPD, 以下「共働団」と略す)なるグループが結成された。この結成にあたって中心的な役割をはたしたツィルケルバッハによれば、「共働団」結成の目的は、キリスト教と社会主義の相互理解の促進であり、キリスト教の影響力を政治や公的生活の場において発揮させることであった。「キリスト教と社会主義の相互理解の促進」という理念を掲げた運動は、戦後に新しいものではない。たとえば、ヴァイマル時代には「宗教社会主義者同盟」(Bund der religiösen Sozialisten)が結成されたことがあった。ただ、ツィルケルバッハは戦前のその類の運動を先駆者として評価はしたが、範例とはしなかった。団体名に“in der SPD”(社会民主党の中で)の文字を入れたことからうかがえるように、「共働団」を独自の勢力として宗教社会主義者の政党に発展させてはならないのであって、社会民主党の内部に入り社会主義者との協力関係を樹立することにツィルケルバッハは目標を置いていた。<sup>(1)</sup>

ツィルケルバッハ自身が1947年9月6日にハノーファーの社会民主党中央指導部にあてた書簡によれば、ツィルケルバッハがニュルンベルクの社会民主党に入党したのは1945年10月であった。彼は元来教会に忠実な信徒であり、社会民主党に入党しどのような活動をするかについて、

ニュルンベルクの指導的なプロテスタントと話し合いを重ねていた。彼らの理解と助言を得たうえでツイルケルバッハは社会民主党に入党し、半年を経過して「共働団」の結成にこぎつけたのである。彼の選択した道は、「キリスト者から社会主義者へ」ではなく、「教会に忠実なキリスト者として社会主義者へ」であった。労働者に対するキリスト者と教会の責任を自覚し、教会の影響下にある労働者に対して社会主義の啓蒙活動を展開し、教会に忠実な信徒が偏見をもたれることなく社会民主党の中で活動が許されれば、それは教会と社会民主党との和解に寄与するだけでなく、社会民主党の支持基盤の拡大にもつながると彼は考えたのである。前述のように、シューマッハーは「社会主義者となる動機の多元性の承認」によって、「山上の垂訓の精神」によりて社会民主党に入党する新黨員に歓迎の意を表明したが、ツイルケルバッハはその呼びかけに答えた一人であった。<sup>(2)</sup>

「共働団」は、隔週の水曜日、夜七時半にニュルンベルクで公開の定例集会を開いていた。「共働団」の支部は、1947年初頭にはバイエルン全体で二十を数えていた。七人以上結集できない場合は支部結成の要件を満たすとされなかったため、その場合はニュルンベルクの指導組織に直接加入することとされた。

「共働団」の結成後間もなくツイルケルバッハが力を注いだのは、連続公開講演会の開催であった。この啓蒙活動によって、「キリスト教と社会主義」という問題に対し世論を喚起しようとした。この講演会は、開催の正確な日時は不明だが、ニュルンベルクで1946年4月から年末にかけて六回開催された。演者と職業、演題は以下の<sup>(3)</sup>とうりである。

- ① アルベルト ( Albert ), 社会民主党の専従黨員  
「我々の時代の教会と社会民主党」
- ② クラウス ( Krauß ), カトリックの司祭  
「新しい視点からみた社会主義とキリスト教」
- ③ ホーファー ( Hofer ), プロテスタントの牧師

「マルクス主義とキリスト教」

④ トマ (Thoma), 裁判官

「政治の中におけるキリスト者」

⑤ ハース (Haas), 社会民主党の専従党员

「教会・憲法・社会民主党」

⑥ フート (Huth), 労働組合専従書記

「我々、キリスト教社会主義者は何を欲するか」

結成後半年を経過して「共働団」は、機関誌、“Rundbrief der Arbeitsgemeinschaft christlicher Sozialisten in der SPD”（以下【通信】と略す）を発行する体制を整えた。創刊は1946年11月、月刊であったがいつまで刊行されていたかは不明である。【通信】の発行部数は創刊号が一千部、第三号から五倍の五千部となり、四号も五千部発行されている。編集責任者はツィルケルバッハであった。【通信】を印刷する紙の配給はバイエルンの社会民主党から受けていた。物不足の統制経済下にあったこの時期、紙は貴重品であったから、このことはバイエルン社会民主党のツィルケルバッハの運動に対する一定の理解の証と考えて大過はあるまい。ツィルケルバッハは「共働団」が社会民主党内で特殊な世界観を持つ閉鎖的な小集団、心の底では歓迎されないが党の「寛容」によって存在を許される異分子として扱われることに警戒心を抱いていた。そうではなく、社会民主党内にあって「キリスト教と社会主義」という問題を真面目に考えるすべての人に門戸を開いて連帯する、積極的な対話と活動の場として「共働団」を結成したのである。連続講演会の演者もそのような目的意識から、宗派・職業にバランスを取ろうとした配慮がうかがえる。【通信】に掲載する論文・紹介記事の選択にも、同じことが指摘できる。

以上のような目的意識を有していた以上、ヘッセン、ベルリン、ハンブルク、テュービンゲンにあったプロテスタントを主体とするニュルンベルクと類似した運動だけでなく、カトリックの「ウナ・ザンクタ」

(Una Sankta) に対する共感が『通信』で語られていたのは不自然なことではなかった。ツィルケルバッハはドイツ国内の運動だけでなく、国際的な宗教社会主義運動の動向にも注意を払い、『通信』で啓蒙活動をした。特に、1946年9月にスイスで開かれた戦後最初の宗教社会主義者国際会議を「特に希望に満たされる出来事」として紹介している。この会議には九か国から代表が集まっていたが、ドイツ社会民主党からはヘッセンのメツガーが参加していた。この会議の宣言は「生産関係は人間がもはやその奴隷ではないように形成されなければならない」と述べ、「神の欲したもう人間の尊厳」のために生産手段の社会化・能力に応じた生産と必要に応じた分配・労働力の商品化の拒否などを主張し、資本主義的不正を克服できるのは社会主義的な民主主義のみであるとしていた。<sup>(4)</sup>

## II キリスト教社会主義者と社会民主党指導部

「共働団」に結集した社会主義者が特に関心を持ったのは、社会主義の基礎付けを何に求めるかという問題であった。彼らが社会主義者として社会化に賛成する場合、それは「人間の尊厳」「公正」のゆえであり、唯物主義と階級闘争には反対の立場を明確にしていた。「共働団」のこのような主張は、1933年までドイツ社会民主党に深く根ざしていた思想伝統、マルクス主義と相容れない内容を含んでいた。

前述のように、ツィルケルバッハは1946-47年の間、終始ニュルンベルクを拠点としながらも、ミュンヘンの社会民主党州指導部の理解を得て活動していたが、ハノーファーの社会民主党中央指導部はキリスト教や教会に対してどのような見解を持っていたのであろうか。

1945年8月、戦後初代の党首となるハノーファーのクルト・シューマッハーは、再建途上の各地の社会民主党のグループに送った「政治的方針」で、キリスト者のナチズムに対する抵抗による犠牲に言及しては

いる。しかし、彼らの抵抗は信仰や教会が迫害されたからであって、政治的自由や民主主義のためではなかったとして批判的見解を示している。そのような非政治的抵抗は特にプロテスタント教会の場合はっきりしてるといのが、シューマッハーの考えであった。<sup>(1)</sup>

シューマッハーが教会やキリスト教について論じた演説・著作は多くはないが、彼の教会観を考察するために示唆的なのは、1946年6月にヴァイマル時代の社会民主党の有力者のひとりである当時ニューヨークに在住していたフリードリヒ・シュタンプファー(Friedrich Stampfer)とシューマッハーとの間に交わされた戦後の教会の政治勢力としての評価をめぐる議論である。シュタンプファーは、教会を政党と競合する勢力ととらえ、再建された社会民主党はドイツ人の国民意識を代表する政治勢力の役割を引き受けなければならないのに、その役割は教会に奪われつつあるのではないかという懸念を抱いていた。それを憂える気持ちから彼はシューマッハーに手紙を書いたのである。ドイツ人のナショナリズムをもっぱら右翼に動員されるのでなく、民主主義と調和させる政党となれなかったことにヴァイマル時代の社会民主党の失敗の一因をみていた点でシューマッハーとシュタンプファーは一致していたが、教会を政治的社会的勢力として遇する事はシューマッハーの同意できぬところであった。彼はシュタンプファーの懸念を根拠のないものと退け、「政治的方針」と同様の議論を展開して反論した。<sup>(2)</sup>

このようなシューマッハーの教会観、キリスト者に対する評価と「社会主義者となる動機の多元性の承認」によるキリスト者への呼びかけは矛盾したものではなかった。すなわち、シューマッハーは「宗教は私事である」という社会民主党の伝統的原則を一步も踏み外してはいなかったのである。その原則に立脚しての個人レベルでの「社会主義者となる動機の多元性の承認」であった。それは、個人の内面の自由を尊重する立場から個人レベルでキリスト者に教会脱退を求めないという程度の消極的な受容であって、組織や政治的社会的勢力としての教会に対しては

一線を画して否定的な考え方を持ち続けていた。

これに対し、教会の一部の有力者には、特に南ドイツの教会の指導者には以下のように社会民主党との対話に積極的な姿勢を示す人々がいた。彼らは、第三帝国の時代の共通の迫害体験と抵抗運動を通じての連帯をその動機としてあげる。ドイツ的キリスト者の支配が貫徹せずユニークな抵抗運動を展開したヴェルテンベルク<sup>(3)</sup>の邦教会監督(Landesbischof)であったテオフィル・ヴルム(Theophil Wurm)は、党派的には保守的な人物であった。その彼にとって得がたい体験となったのは、1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件の犠牲となった労働組合員との出会いであった。この経験はヴルムの胸に刻み込まれ、1945年5月以降彼はヴェルテンベルクで教会と労働組合員・社会主義者との対話を始めていた。彼は教会が政治権力と結託して「小さき者」を抑圧し、他方で彼らに忍従を説教する機関ではなく、キリスト教には人間の自由や解放を推進する思想が含まれていると語り、イギリスの労働党と教会との間にあるような信頼関係を築いてゆこうと述べた。彼によれば双方の誤解が解消されるならば、両者の間に戦争状態が継続されなければいけない理由は存在しない。両者の誤解の解消がドイツ国民全体にとって重要であって、「キリスト教」という名を冠する政党が必要とは考えない、と。<sup>(4)</sup>

バイエルン邦教会監督のハンス・マイザー(Hans Meiser)もまたヴルムと同じように、キリスト者が「キリスト教」を冠した政党に入るべきという議論には組しなかった。ただ実際の問題として、1933年以前は教会に通うキリスト者が社会民主党で活動しようと思えば、批判されたり忌避されたりすることなしに済ますことは困難であった。しかし、戦後になって社会民主党は教会員に良心の葛藤を引き起こさずにはいない教会攻撃を止め、新しい方向に一步を踏みだそうとしているが、この方向転換は党内の多くの議論なしには貫徹されないであろう。であるから、数十年にわたって教会と階級意識を持った労働者との間を支配していた不幸な誤解と不信が克服されるために現時点できわめて大切である

のは、真に確信的なキリスト者の党員がしっかりと社会民主党に踏みとどまり、社会民主党の内部に入って共に働くことである、と述べていた。<sup>(5)</sup>

ボンヘッファーのように信仰の抵抗から政治的抵抗へ発展した例も教会の抵抗にはあった。しかし、シューマッハーはヒトラーの政權掌握後間もなく逮捕されて強制収容所に送られ抵抗運動に直接関与できなかった個人的体験に起因するのか、対話推進者のように教会を評価する思想が彼にはなかった。このような教会観を持つ社会民主党党首が、対話集會やツィルケルバッハの運動に対して無理解な対応を取るであろうことは想像に難くない。ツィルケルバッハはキリスト教と社会主義を戦後の二大勢力ととらえ、それを前提として両者の新たな関係を構築しようとしたのである。また、思想的にも「通信」に掲載された議論を見るかぎり、「共働団」のキリスト教社会主義者はマルクス主義、唯物史観をはっきりと否定していた。シューマッハーはマルクス主義の再検討を呼びかけてはいたが、「階級闘争」と「経済的歴史把握」の二点においてマルクス主義はまだ過去のものとはなっていないという立場をとっていた。<sup>(6)</sup>

ところで、1947年夏は社会民主党中央指導部の文化政策委員会が中心となって進めていた、新綱領に向けての社会主義の基本的価値の吟味の試みがひとつの頂点に達した時期であった。史的唯物論の一面性を指摘し、「自由な社会主義」の理念を盛り込んで、1959年のバート・ゴデスベルク綱領の礎石を据えたと評価される決議の採択されたツィーゲンハイン文化政策会議が開かれたのは1947年8月であった。<sup>(7)</sup> ツィーゲンハイン決議は倫理的社会主義者が中心となり、こと教会問題に関しては直接的な言及を避けており、ツィルケルバッハには満足のゆくものではなかったと推察される。また、彼自身は新綱領の早期制定に積極的に関わろうとした形跡は認められない。しかし、バイエルンを越えてハノーファーの社会民主党中央指導部に足掛かりを持ち党と教会との対話を推進しようとするれば、その場は文化政策委員会において他にはなかった。そこでツィルケルバッハがハノーファーの文化政策委員会の責任者アル

ノ・ヘニヒ (Arno Hennig) に要求したのは、「共働団」に文化政策委員会の椅子を一つ割り当ててほしいということであった。これはハノーファーの強い拒絶にあった。一度拒絶されても断念せず、ツィルケルバッハはシューマッハーに直訴状を書いて重ねて要求を出した。当時文化政策委員会には、ルートヴィヒ・メツガーらキリスト教社会主義者が加わっていたが、ハノーファーは、彼らは傑出した社会民主党の政治家として評価されてその地位を得たのであって、キリスト教社会主義者の代表として文化政策委員会に迎えられたのではないということを強調し、ツィルケルバッハの要求を重ねて退けた。ヘニヒはツィルケルバッハの要求は特殊であり、他のキリスト教社会主義者と同じように党の中でふるまっていないと思われたのである。が、ツィルケルバッハにしてみれば、ハノーファーの拒絶は社会民主党の多数派の宗教に敵対的な文化が再び支配的になり、彼が社会民主党に入党した頃の寛大な雰囲気<sup>(8)</sup>が失われつつあることの証拠と理解されたのである。

ハノーファーの文化政策委員会への代表権をめぐるツィルケルバッハと社会民主党中央指導部との対立は、ツィルケルバッハの運動がハノーファーの社会民主党中央指導部のなかでどのような扱いを受け、いかなる評価を受けていたのかを端的に示す。

ツィルケルバッハは1947年11月9日、ニュルンベルクの社会民主党書記フランツ・ハース (Franz Haas) に書いた手紙で、9月にバイエルン社会民主党指導部が約束してくれた【通信】を印刷するための紙の供給がストップしており、その結果【通信】を発行することができなくなっていると窮状を訴えている。ツィルケルバッハによれば、聖職者のなかに反社会主義的心情の持ち主がいなくはないが、プロテスタント・カトリックの区別なく教会の大勢は社会主義政党との対話と和解を志向しており、現実の社会問題に対して評価に値する対応を見せるようになってきている。教会側に変化の兆しが見られるこの時に、社会主義思想や社会民主党の活動を教会へ伝達する役割を果たしている【通信】の発行を停止

せざるを得なくするとは、なんという短視眼的措置であるかとツィルケルバッハは述べ、ハースに対しバイエルン社会民主党委員長の地位にあったヴァルデマール・フォン・クネーリングゲン（Waldemar von Knoeringen）へのとりなしを依頼していた。<sup>(9)</sup>

1946年はバイエルン内の活動に関する限り、一定の前進を見ていた。しかし、プロテスタントに社会主義を広める懸け橋としての積極的な認知はハノーファーの党中央からは得られず、1947年に入ってから前年よりもツィルケルバッハの「共働団」の活動は困難になりつつあった。しかし皮肉なことに、この下降期にツィルケルバッハの念じていた、バイエルン州レベルでの社会民主党とプロテスタント教会との対話集会へ向けての道が開かれてゆくのである。

### Ⅲ バイエレンの対話集会

1947年8月21日、トゥッティンゲンでプロテスタント教会の主催する「労働者のための修養会」にツィルケルバッハは参加し、教会と社会民主党の新しい方向について講演する機会を与えられていた。これが契機となって、8月23日にツィルケルバッハはバイエルンのプロテスタント教会の上級教会参事会員（Oberkirchenrat）であったハンス・シュミット（Hans Schmidt）の知己を得て会談し、キリスト教と社会主義との相互理解の重要性の認識において両者は一致した。<sup>(1)</sup>

敗戦後の荒廃し混乱を極めたドイツの労働者にいかにしたらキリスト教が近いものとなるかを課題として自覚していた教会にとって、社会民主党内で同じ志を持って活動していたツィルケルバッハは格好の協力者であった。シュミットはトゥッティンゲンでの出会いに印象を受け、ミュンヘンに戻ったあと教会監督と社会民主党との対話集会の可能性について話し合い、その支持を得て対話集会の準備に着手した。シュミットは9月17日付けのツィルケルバッハ宛の書簡で以上の教会側の動向につい

て説明し、対話集會を当面は小人数かつ非公開で行なうこと、場所としてフェルトを提案した。シュミットによれば、この時点ですでに教會側の代表は内定しており、教會が招待すべき社会民主党側の代表者の名前を知らせて欲しいとツイルケルバッハに依頼した。<sup>(2)</sup> ツイルケルバッハはこの手紙を受けて9月24日にバイエルン州社会民主党指導部に連絡を取り、対話集會を開くにあたって社会民主党の代表を誰にするか人選を委ね、それについての情報をくれるようにとの希望を表明した。<sup>(3)</sup>

これから以後しばらく、社会民主党内での立場が危うくなるのと対照的に、ツイルケルバッハは教會での啓蒙活動を積極的に展開してゆく。彼は10月5日、フランケン地方のグロースグリュンドバッハの教會で「社会民主主義者とキリスト教」と題する講演の機会を与えられ、翌日は「福音と労働者」というグループをつくっていた14名の牧師と意見交換をしていた。教會がツイルケルバッハを招いて教會のなかで社会主義とキリスト教の敵対関係の解消のために話す場を与えていたのに対し、社会民主党の集會で同じように牧師に発言の機会を与えられていたかについては疑問である。1947年秋の「共働団」の活動をバイエルン社会民主党指導部に報告した10月24日付けのツイルケルバッハの書簡によれば、引き続き教會での講演の予定が入っており、彼の活動は社会民主党の将来にとって大切な課題を果たしつつあるのだとして理解と支援を求めている。しかし、このころは前年と比べてツイルケルバッハの活動に対する偏見が強くなっており、彼は孤立感を強めていた。11月9日のバイエルン州社会民主党指導部あての手紙では、1933年以前は社会民主党とは隔絶した世界にいたキリスト者の広範な層を社会民主党に引き入れる絶好の可能性が目の前にあるのに、社会民主党はその好機を逸しようとしているのではないかとの深い懸念を表明していた。<sup>(4)</sup>

社会民主党における「共働団」の地位の確立はツイルケルバッハの願いどおりには進まなかったが、対話集會の準備は1947年11月に入って進展をみせた。11月4日には社会民主党の人選が終了し、氏名のリストが

バイエルン社会民主党指導部からツィルケルバッハへ通知された。指導部は参加者の数は多くなるべきではないと考え九名に絞ったが、その中には委員長(5)のクネーリングンが含まれていた。

12月1日にはシュミットからツィルケルバッハへ書簡が送られ、バイエルン・プロテスタント教会の代表八名の氏名が伝えられた。シュミットはここにいたるまでのツィルケルバッハの尽力に感謝を捧げ、対話集会の実現のため教会側からクネーリングンに正式の申し入れをすることを約束した。(6)

しかし、この約束は即座には実行されなかった。教会側からクネーリングンに対話集会開催の申し入れの書簡が送られたのは、それから三ヶ月を経過した1948年3月1日であった。この書簡の執筆者、教会参事会員ジーモン（Simon）によれば、ツィルケルバッハの提案に対しバイエルンのプロテスタント教会上層部は当初から積極的であったが、教会の中にはさまざまな理由から対話集会に躊躇する者もあり、彼が準備と調整の役に任ぜられた。遅延は、その調整に時間を要したからであった。このような教会側の内部事情をふまえて、ジーモンは対話集会に臨む教会の目的や意図を次のように表明した。プロテスタント教会は福音の社会的倫理的要求に基づいて不偏不党の立場を堅持しなければならない。福音の社会的倫理的要求に反することを標榜するのではなければ、すべての政党に教会は開かれている。それが原則である。しかし、実際には、反社会主義的政治勢力から教会への働きかけは戦後も絶えず強く、その結果プロテスタント教会が一面的な政治的態度決定を下していると疑われたり、また事実そのような結果になる危険性が皆無とは言い切れない。そのような傾向に対する危惧と反対の念から、釣り合いをとるためにバイエルンのプロテスタント教会は社会民主党との対話集会を希望するのである、と。世俗的政治権力への従順を自己批判したあとで、ジーモンは、反省し自己変革すべきは教会だけではなく、社会民主党も教会との対話を通じて制度や活動を戦後の現実に適合したものにしてゆかなければ

ば、党の精神的な新出発は不可能であろうと述べていた。

教会側から提案された対話集会の形式は、特定の主題を設定し両者から一人ずつ問題提起者を出し、それを土台にして自由に議論を展開してゆこうというものであった。教会から提案されたテーマは「社会民主党と教会との関係—過去と現在—」であった。特に、第一次世界大戦終結までの双方の対立関係がどのようにして生じ双方に受容されていったのか、双方がお互いのイメージをどのようにして形成していったのか、それが戦間期においてどのように変わり現状ではどのような相互関係が生まれているか、を話し合いたいというのが教会の希望であった。すなわち、対話集会を目前の政治課題の議論からは遠ざけ、最初から対話のテーマを狭く限定すべきではなく、歴史的かつ体系的に大きなテーマを扱うべきであると考えていたのである。教会は短期的に社会民主党と共通したある結論を出す事を目的とせず、長期的に構えて意見の交換を続けることにさしあたり意義を見いだそうとしていた。<sup>(7)</sup>

教会側の正式の申し出を受けて、クネーリングエンはハノーファーの社会民主党中央指導部のオレンハウアーに対話集会の承認を得るため連絡をとった。<sup>(8)</sup> 3月13日にはバイエルン社会民主党指導部のもとに対話集会で社会民主党を代表して基調報告を委嘱されたエルンスト・ブレナー (Ernst Brenner) から承諾の返事が届いた。ブレナーの書簡で注目されるのは、第一回目の対話集会では教会側の提案した議事運営方針・議題を受け入れるものの、「教会参事官のジーモンが提案するような理論的歴史的問題に迷い込むよりも、現実の重要な問題を前面に押し出したほうが望ましいように思われる」と述べられていることである。<sup>(9)</sup> 「現実の重要な問題」とは生産手段の社会化と土地改革の問題である。対話集会に臨む両者の姿勢の質的な相違は明らかであった。

半年以上にわたって準備の重ねられた対話集会の第一回目は、1948年3月31日にフルトで開かれた。クネーリングエンがオレンハウアーに書いた報告書によれば、参加者は最終的には双方8人ずつの計16人であっ

た。議事進行は、ジーマンの提案に添って行なわれた。社会民主党からは教会に対して、教会の主張する政治的中立性は必ずしも教会自身によって貫徹されず、重大な政治的局面においては教会は反動の側につくとの批判が浴びせられた。しかし、クネーリングン個人は「教会に社会問題に対する理解が増しつつある」と好印象を受け、対話集会を継続する方針であり、次回の集会には社会化の問題を提起したいと報告していた。<sup>(10)</sup>

一回目の対話の終了後、社会民主党は教会に対し社会化の必要性に理解を得る場として対話集会を利用するという姿勢を強めてくる。基調報告を行なったプレナーはクネーリングンに、次の対話集会では社会民主党が議長をつとめ社会化問題を提起すべきであると伝え、基調報告者にR.ツォルンを推薦した。対話集会開始にあたっての前提の根本的変更を社会民主党は教会に求めるようになったのである。<sup>(11)</sup>

二回目の対話集会は6月上旬に予定されていたが、延期が重ねられ、結局二回目が開催されたのは10月11日、場所はニュルンベルクであった。<sup>(12)</sup> この延期の理由は、表向きには双方の日程上の都合が合わないからであったが、対話集会の目的や議題、制度化をめぐる教会と社会民主党の考え方の違いが顕在化していったことが少なからぬ影響を与えていたのではないかと推察される。ツィルケルバッハは対話集会に対する社会民主党の姿勢を批判していた。<sup>(13)</sup>

社会民主党の組織のなかでは、ツィルケルバッハもその一員であったニュルンベルクを活動拠点とするフランケン<sup>(14)</sup>の地方組織の積極的な働きかけが、二回目の対話集会の実現にあずかって力があつた。この場で、社会民主党側はかねてからの方針どおり、社会化問題を取り上げて、教会にこの問題にどのような立場を取るのかを表明するように迫つた。それに対して社会民主党に送り付けられた教会の回答は「ルターは経済生活<sup>(15)</sup>に対し何と言っているか」という文章であった。これをもって、ツィルケルバッハが働きかけ、バイエルンの社会民主党とプロテスタント教

会の指導部レベルで1948年3月に開始された対話集会は中断することになったのである。

この対話集会の開催の橋渡しが、ツィルケルバッハの努力の限界であった。「共働団」の結成以来、その正式名称の確定は社会民主党との関係とも関わり、ツィルケルバッハの頭を悩ます問題であった。彼は“in der SPD”と、社会民主党との密接な関係を明示する名称に意義を見だしていた。しかし、キリスト教社会主義者は超党派的政治勢力として成長していた。そのため、フランクフルトを中心とする「ドイツ宗教社会主義者同盟」、および国際的な組織である「宗教社会主義者国際同盟」との組織的な関係付けが問題となった。社会民主党内で孤立化の道を歩みつつあったツィルケルバッハは、1948年11月に「共働団」を「同盟」の組織にバイエルン代表として組み入れる決定を下した。ツィルケルバッハは従来の「共働団」を解散するのではないとしたが、この決定は事実上社会民主党との組織的な分離を意味していた。対話集会の挫折とともに、ツィルケルバッハは社会民主党にいる場所を失ってゆくのである。<sup>(16)</sup>

ツィルケルバッハの運命は、「社会主義者となる動機の多元性の承認」などで社会民主党の宗教・教会に対する姿勢が変化したと考えて戦後間もなく入党し、党に地歩を占めようとしたキリスト教社会主義者が遭遇した困難を象徴していたと考えられる。失望し、社会民主党を脱党すべきか悩んだある労働者にバイエルン邦教会の指導的地位にいたある牧師は、「我々は確固としたキリスト者が、社会民主党においても労働組合においても重んじられるようになることを歓迎する」と述べ、キリスト者としての立場を崩さないで活動し、それでなお社会民主党に活動の場が与えられるのなら困難があっても踏みとどまるように勧めていた。<sup>(17)</sup>彼らにとって、対話集会の挫折は、始まりの終わりだったのである。

## おわりに

第二次大戦後も、プロテスタント教会の政治的立場は大勢としては1933年以前と劇的に変化したとは思えない。ただ、対話集会に際して、自己変革への意欲・対話への取り組みは、社会民主党より教会の側により強く認められる。対話を通じ、教会が社会民主党との関係を歴史的に振り返り、これからの両者のあり方を腰を落ち着けて考えてゆこうとしたのに対し、社会民主党の指導者たちは社会化に教会の支持を得るための場として対話集会を利用しようとしたのにすぎなかった。また、ツィルケルバッハのような人々、勢力としての教会と社会民主党との協力、史的唯物論や階級闘争の否定を明確に旗印として掲げたキリスト教社会主義者の活動できる余地は限定的で、党からの反発はなお強かったのである。シューマッハーの宗教観・教会観は社会民主党の伝統的な教会観に近く、バート・ゴードスベルク綱領にいう「教会と社会民主党との協力関係（Partnerschaft）」という思想は、シューマッハーの「社会主義者となる動機の多元性の承認」に直接さかのぼることはできない。それによってシューマッハーの言おうとしたことは、「山上の垂訓の精神」を社会主義者となる動機とする個人は、社会民主党入党に際してかつてのように教会脱退を強えられることはない、という程度の消極的容認の段階にとどまっていた。

戦後再建されたシューマッハー時代の社会民主党を、1925年のハイデルベルク綱領の党から1959年のバート・ゴードスベルク綱領の党へと変化してゆく過程で、二つの極の間のどのあたりに位置すると評価すべきかはむづかしい問題である。シューマッハーを中心とした社会民主党の再建を論じた拙稿で、1945-1946年の社会民主党の再建過程で「すでに少なくとも理念的には1959年のバート・ゴードスベルク綱領の精神的外枠が、再建SPDの進むべき方向としてシューマッハーによって与えられていたと言って過言ではないであろう。」<sup>(1)</sup>と書いた。「精神的な外枠」が

認められるという指摘を修正する必要は現在もないと思う。ただ、党組織・党員構成・支持階層などの社会学的問題は傍らに置き、社会主義の基本的価値に関わる問題に限定しても、シューマッハー時代からパート・ゴードスベルク綱領までの社会民主党の基本的かつ直接的連続性を強調することには慎重であるべきであろう。

「社会主義者となる動機の多元性の承認」が再建された社会民主党の絶対的指導者によって繰り返し語られたことは事実であるが、興味深いことにこの発言は1946年までに集中し、1947年に入ってから前年に語られたような内容と形式、すなわち、三つの動機に等しい権利を認めるという形でのシューマッハーの発言は見当らなくなる。見落としている恐れなしとはしないが、少なくとも1946年までのような頻度と強調度をもって語られなくなったことは確かである。1947年と1948年の党大会の基調演説（1948年はシューマッハーが病気のため代読）には、見受けられなくなっている。1946年には党大会の基調演説は言うにおよばず、地方遊説でも口ぐせのように強調されており、シューマッハーの演説がパンフレットとして印刷される際には、<sup>(2)</sup>「動機の多元性の承認」の部分はゴシック体になっていた。それだけに、1947年に入ってから「変化」には引っ掛かりを覚えるのである。これには何か背景があるのであろうか。

シューマッハーはプラグマティストとして広範な中間層を社会民主党の支持層に組み入れるため、「動機の多元性の承認」を打ち出した。しかし、その目標は短期的には、すなわち1945-1946年の再建過程では、達成されたとは言いがたかった。<sup>(3)</sup>おそらくそれとともに、「動機の多元性の承認」の強調は党再建が一段落した後のシューマッハー時代の社会民主党においては前面から退いていったと言うべきであろう。

## 註

## はじめに

- (1) *Protokoll der Verhandlungen des Außerordentlichen Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands vom 13.-15. November 1959 in Bad Godesberg*, 58f.
- (2) Ebenda, 24f.
- (3) Martin Möller, *Das Verhältnis von Evangelischer Kirche und Sozialdemokratischer Partei in den Jahren 1945 bis 1950 : Grundlagen der Verständigung und Beginn des Dialoges*, Diss. Marburg, 1979.

## I

- (1) “Rundbrief der Arbeitsgemeinschaft christlicher Sozialisten in der SPD, Nr. 2” , Nürnberg, Januar 1947, 2.  
aus Bestand Landesverband Bayern, Kasette Nr.1 Arbeitsgemeinschaften 1946-1948.
- (2) Brief Julius Zirkelbachs an Arno Hennig, Nürnberg, den 6. September 1947, aus Bestand Schumacher, Kasette Nr. Q-26 II, Korrespondenz 1947-52.
- (3) “Rundbrief der Arbeitsgemeinschaft christlicher Sozialisten in der SPD, Nr. 2” , Nürnberg, Januar 1947, 2.
- (4) “Rundbrief der Arbeitsgemeinschaft christlicher Sozialisten in der SPD, Nr. 3” , Nürnberg, Februar 1947, 4.  
aus Bestand Landesverband Bayern, Kasette Nr.1 Arbeitsgemeinschaften 1946-1948.

## II

- (1) Kurt Schumacher, *Reden-Schriften-Korrespondenzen 1945-1952*, herausgegeben von Willy Albrecht, Berlin/Bonn, 1985, 271f.
- (2) Ebenda, 457f.
- (3) Jörg Thierfelder, *Das Kirchliche Einigungswerk des württembergischen*

Landesbischofs Theophil Wurm, Göttingen, 1975, 311S.

- (4) “Rundbrief der Arbeitsgemeinschaft christlicher Sozialisten in der SPD, Nr. 3”, Nürnberg, Februar 1947, 6.
- (5) Ebenda, 6.
- (6) 拙稿「ドイツ社会民主党の再建 1945-1947年 ークルト・シューマッハーの指導を中心に」【歴史学研究】No.519,1983.8.,11頁。
- (7) Georg Eckert, “Auf dem Weg nach Godesberg. Erinnerungen an die Kulturkonferenz der SPD in Ziegenhain,” *Freiheitlicher Sozialismus*, Bonn-Bad Godesberg, 1973, 49ff.
- (8) Brief Julius Zirkelbachs an Arno Hennig, Nürnberg, den 6. September 1947,  
Brief Zirkelbachs an Schumacher, Nürnberg, den 13. September 1947,  
Brief Hennigs an Zirkelbach, Hannover, den 3. Oktober 1947,  
aus Bestand Schumacher, Kasette Nr. Q-26 II, Korrespondenz 1947-52.
- (9) Brief Zirkelbachs an Franz Haas, Nürnberg, den 9. November 1947,  
aus Bestand Landesverband Bayern, Kasette Nr.211 Partei-Dokumentation.

### III

- (1) Brief Zirkelbachs an Landesvorstand der SPD in Bayern, Nürnberg, den 24. Oktober 1947, aus Bestand Landesverband Bayern, Kasette Nr.211 Partei-Dokumentation. (III章で引用するのは、このKasetteに所蔵されている書簡である)
- (2) Brief Hans Schmidts an Zirkelbach, München, den 17. September 1947.
- (3) Brief Zirkelbachs an Landesvorstand der SPD, Nürnberg, den 24. September 1947.
- (4) Brief Zirkelbachs an Landesvorstand der SPD, Nürnberg, den 24. Oktober 1947.
- (5) Brief des Landesvorstandes an Zirkelbach, München, den 4. November

1947.

- (6) Brief Hans Schmidts an Zirkelbach, München, den 1. Dezember 1947.
- (7) Brief Matias Simons an Waldemar von Knoeringen, Nürnberg, den 1. März 1948.
- (8) Brief Waldemar von Knoeringens an Ollenhauer, München, den 9. März, 1948.
- (9) Brief Ernst Brenners an Waldemar von Knoeringen, den 13. März 1948.
- (10) Brief Waldemar von Knoeringens an Ollenhauer, München, den 5. April 1948.
- (11) Brief Ernst Brenners an Waldemar von Knoeringen, München, den 15. April 1948.
- (12) Brief Waldemar von Knoeringens an die Teilnehmer des Gesprächs, München, den 29. September 1948.
- (13) Brief Zirkelbachs an Landesvorstand der SPD, Nürnberg, den 22. Mai 1948.
- (14) Brief Waldemar von Knoeringens an Simon, München, den 29. September 1948.
- (15) "Was sagt Luther zum Wirtschaftsleben?" , Amt für Gemeindedienst, Nürnberg, den 20. November 1948.
- (16) Martin Möller, a.a.O.,254f.
- (17) Brief des Landesbischofs der Evangelischen Kirche in Bayern, Sekretariat : Kirchenrat Rusam an Friedrich Küttler, München, den 14. Mai 1948.

おわりに

- (1) 前掲拙稿, 13頁。
- (2) 前掲拙稿, 11頁。
- (3) 前掲拙稿, 14頁。